

〇〇〇

第 92 回信州大学第一内科集談会

〇〇〇

日時 平成 22 年 1 月 31 日（日）

会場 信州大学医学部附属病院外来棟 4 階 中会議室

12:00-13:00 理事会 同 外来棟 4 階 研修室 6,7

12:00-13:00 昼食

13:00-13:10 林 正幸同窓会長挨拶

久保惠嗣教授挨拶

13:10-13:30 総会

13:30-15:15 一般演題 3 題、特別報告 2 題

研究報告、同窓会賞受賞者講演

— 休憩 —

15:25-16:25 特別講演

内科学第二講座 田中 榮司教授

演題：ウイルス肝炎診療のポイント

16:25-16:30 集談会総括 花岡正幸

16:35-18:00 懇親会 附属病院外来棟 5F ソレイユ

特別報告

座長：長野市民病院 平井 一也

1. 新型インフルエンザ 重症例の経験

信州大学医学部附属病院 呼吸器センター 呼吸器・感染症内科 横山俊樹

2. 地域がん登録について

信州大学附属病院がん総合医療センター 臨床腫瘍部 小泉 知展

研究報告

座長：信州大学附属病院がん総合医療センター 臨床腫瘍部 准教授 小泉知展

1. 胸腺癌における ERCC1, COX-2 発現の検討

信州大学医学部附属病院 呼吸器センター 呼吸器・感染症内科 吾妻 俊彦

同窓会賞受賞者講演

座長：同窓会長 林 正幸

15:15-15:25 -----休 憩-----

15:25-16:25

特別講演

座長：信州大学医学部内科学第一講座 教授 久保惠嗣

ウイルス肝炎診療のポイント

信州大学医学部内科学第二講座 教授 田中 榮司先生

16:25-16:30

集談会総括 内科学第一講座 准教授 花岡正幸

【抄 録】

一般演題

1. CT 検診によって発見された肺 MALT リンパ腫の一例

長野厚生連篠ノ井総合病院呼吸器科
同 呼吸器外科

○池川 香代子、高見澤 明美
青木 孝學

69 歳,男性。平成 15 年より毎年当院の人間ドックにて胸部 CT を受けていた。平成 19 年 9 月の胸部 CT にて右肺上葉 S1 縦隔側にわずかな陰影を認め、平成 20 年 11 月には同部位の陰影の悪化を認めた。このため,悪性疾患を疑い平成 21 年 3 月 9 日 VATS 施行。術中迅速診断にて肺 MALT リンパ腫の診断となった。

人間ドックで毎年胸部 CT を受けていたことで経年的な変化を観察することができ,VATS にて診断に至った一例と考えられた。

2. 新型インフルエンザに対する当院の対応

長野松代総合病院 内科 ○宮原隆成 堀田順一 百瀬智康 三澤卓夫 北澤邦彦

当院は第二種感染症指定病院であり、現在世界的大流行を引き起こしている新型インフルエンザに対し発生当初より発熱外来を開設し、陰圧感染症病室にて入院加療を行いました。

本年3月メキシコにて発生した新型インフルエンザの疑い例は、5月7日より保健所の誘導のもと当院への受診が始まりました。当初、高病原性インフルエンザを想定した対策をとらざるを得ず、医師2名、看護師2名、事務職員2名がPPEによる装備で対応していました。5月16日国内第1例目、6月13日飯田市立病院での長野県第1例目の発生に続き、6月18日に長野市での発生が当院にて確認されました。当院には3人全員が感染症病床に入院し、全員速やかに軽快し退院しました。

7月より新型インフルエンザは全医療機関にて対応しており、12月には患者数の減少が認められています。

以上当院での対策と症例につき発表します。

3. 一般中学生における出生時体重と生活習慣病との関連

信州大学医学部保健学科 ○本郷 実、阪口しげ子、日高宏哉、中西啓介、市川元基
大平雅美、坂 口けさみ、金井 誠

信州大学医学部小児科 鶴田悟郎、小池健一

信州大学医学部附属病院消化器内科 田中直樹

松本大学人間健康学部健康栄養学科 廣田直子

長野県松本保健福祉事務所 飯澤裕美

【目的】従来、生活習慣病（成人病）の発症や進行には個人の生活習慣が深く関与していることが明らかにされている。一方、近年、出生時体重と将来の生活習慣病発症との関連が注目されている（生活習慣病胎児期起源説）。本研究では、一般中学生を対象として出生時体重と生活習慣病との関連について検討した。

【方法】対象は長野県在住3中学校の生徒585名（男子307名、女子278名、平均年齢13.2歳）で、2005年～2007年の学校健診時に身体測定、血液生化学検査、血圧測定を実施し、アンケート調査により出生時体重の情報を得た。出生時体重から、2500g未満：A群、2500～3500g：B群、3501g以上：C群の3群に分類し、身体測定、血圧、脂質・糖代謝所見との関連について解析した。

【結果】

1. 出生時体重の分布：A群45名（7.7%）、B群452名（77.3%）、C群88名（15.0%）
2. 現在の体格：平均身長、体重は、男女いずれもA群<B群<C群の順で高値を示し、有意差が認められた。
3. 肥満：肥満度 $\geq 20\%$ を示した生徒の頻度は、A群<B群<C群の順に高値を示した。
4. 血圧：収縮期・拡張期高血圧いずれも、A群<B群<C群の順に高頻度を示し、拡張期高血圧の頻度は男子C群で有意に高値を示した。
5. 脂質・糖代謝異常：高中性脂肪血症は女子A群で高頻度を示した。高LDLコレステロール血症および低HDLコレステロール血症の頻度は、それぞれ女子A群および男子A群でやや高値を示した。また、空腹時高血糖は、女子A群で高頻度を示す傾向がみられた。

【結語】低出生体重児および巨大傾向児の生徒は、中学生の時点で肥満、高血圧、脂質・糖代謝異常の頻度が増加する傾向が明らかになった。近年、わが国では低出生体重児の頻度が増加傾向にあり、本研究の結果により、母体側の要因のみならず、これらの児に対する出生後の食事・生活習慣指導など将来の生活習慣病予防に向けたより重点的な個別介入が必要と考えられる。

特別報告

1. 新型インフルエンザ 重症例の経験

信州大学医学部附属病院 呼吸器センター 呼吸器・感染症内科 横山俊樹

2009年春、メキシコに端を発した新型インフルエンザ(pandemic 2009, H1N1)は世界中に流行し、注目を集めている。一部に重症化を呈することが様々な報告により知られているが、日本における重症例の報告は一部に散見される程度であり、十分に実態が知られていない。2010年1月までに信州大学附属病院では新型インフルエンザによる9例の入院症例を経験した。このうち5例でALI/ARDSを発症していた。

これらの経験から得られた知見について報告する。

2. 地域がん登録について

信州大学附属病院がん総合医療センター 臨床腫瘍部 小泉 知展

地域がん登録は、がんの罹患率および予後を評価する重要な疫学調査である。長野県では、平成22年1月より開始され、全国36都道府県目の開始である。信州大学附属病院は、長野県より業務委託を受け、この地域がん登録事業を開始することとなった。今回の発表では、その地域がん登録の運用の実際を提示し、医師会および各医療機関の先生方に、この地域がん登録の意義とがん疫学調査への理解と協力をお願いしたい。

研究報告

胸腺癌における ERCC1, COX-2 発現の検討

信州大学医学部附属病院 呼吸器センター 呼吸器・感染症内科 吾妻 俊彦

Cisplatin(CDDP)を用いた化学療法は様々な癌種に対して使用されているが、CDDP 感受性は DNA 修復系により修飾されることが知られており、その修復タンパク群の 1 つである Excision repair cross-complementation group 1 (ERCC1)が注目されている。ERCC1 陰性腫瘍では癌細胞の白金製剤治療後の DNA 修復能が低く、CDDP 併用化学療法の治療効果が増強され生存期間の延長が得られることが推測されている。一方、Cyclooxygenase-2 (COX-2)は癌の増殖、転移と密接な関連があることが報告されており、COX-2 発現が予後因子として有用である可能性が示唆されている。

胸腺癌は稀な疾患であり、手術不能症例に対する標準治療は確立していない。しかし、これまで CDDP を含む化学療法が有効であったとの報告は散見され、当教室でも化学療法を積極的に行っている。今回、CDDP を含む化学療法に対する反応性と予後成績をまとめ、化学療法の感受性を左右する可能性のある ERCC1、予後因子となる可能性のある COX-2 について、胸腺癌患者の検体を用いて検討したので報告する。

特別講演

信州大学医学部内科学第二講座 教授 田中 榮司先生

ご略歴

【姓名】 田中榮司（昭和 29 年生）

【略歴】

昭和 53 年 3 月 金沢大学医学部医学科卒業
昭和 57 年 6 月 信州大学大学院医学研究科修了
平成 10 年 長野冬季オリンピック選手村総合診療所副所長
平成 13 年 6 月 信州大学医学部内科学第二講座 助教授
平成 20 年 1 月 信州大学医学部内科学第二講座 教授

平成 7-8 年 米国国立衛生研究所留学 (Dr. Harvey J Alter)

【所属学会】

日本内科学会（認定医、指導医）、日本消化器病学会（専門医、指導医、評議員）、
日本消化器内視鏡学会（専門医）、日本肝臓学会（専門医、指導医、評議員）、
日本肝移植研究会（世話人）、日本癌学会、日本ウイルス学会
American Association for the Study of Liver Diseases

【その他】 信州大学肝移植適応委員会委員長
日米医学協力研究会肝炎専門部会研究員
長野県特定疾患等対策協議会委員

【主要研究領域】 肝臓病学／特にウイルス肝炎

講演要旨

ウイルス肝炎診療のポイント

信州大学医学部 内科学第二講座 田中 榮司

肝炎ウイルスはA型～E型の5種類が知られている。これらの肝炎ウイルスが発見されてから20～40年が経過したが、近年、大きく進歩した領域も少なくない。本講演では、一般臨床医として知っておきたいウイルス肝炎診療のポイントについて述べる。

A型とE型は経口的に感染する肝炎ウイルスである。A型肝炎は、既往感染者の減少により高齢者でもみられる肝炎となった。E型肝炎は衛生環境の悪い国の肝炎と考えられてきた。しかし、ブタ、イノシシ、シカなどの生肉の摂取で、日本国内でも感染することが明らかになった。疫学調査では、昔から一定の頻度で感染が起こっていたことが示されている。

最近のB型肝炎診療の進歩はめざましいものがある。ウイルス量が高感度・広定量域で測定することが可能になり、病態の把握にウイルス量の重要性が増した。核酸アナログ薬の導入はB型肝炎の治療に革命的な変化をもたらしたが、耐性株が出現することや治療中止時期が明確でないなどの問題点が残されている。抗悪性腫瘍薬や免疫抑制薬によるB型肝炎ウイルス再活性化の問題は最近の大きな話題である。特に、既往感染から発症するDe novo B型肝炎は致死率が極めて高く、対策が急がれている。

C型肝炎の第一の治療目標はウイルス排除である。1型で高ウイルス量の症例は難治であることが知られているが、ペグ・インターフェロンとリバビリンの併用療法により、最近ではこの領域でも50%以上のウイルス排除率が得られるようになった。今後、プロテアーゼ阻害薬等の新薬により、さらにウイルス排除率が向上することが期待されている。